

新たな不登校が生じない取組 「未然防止」の取組

不登校が生じない魅力ある学校・学年・学級づくりの推進

【取組 1】(A 中学校)

運動会や修学旅行等の学校行事が終了後、各学級で掲示物を作成した。教員が生徒の作文から素敵な一言を抜き出し、クラスメイト全員の言葉が入った掲示物を作成した。この掲示物を廊下に掲示していたので、休み時間に他の学級の生徒と一緒に掲示物を見て、各学校行事の思い出を話す様子も見られた。



【取組 2】(A 中学校)

3年生は修学旅行で広島の平和記念公園に献ずるという目標を学年で掲げ、学級活動等の時間を使って鶴を折る活動を行っていた。活動中は生徒主体の時間となり、折り方の分からない生徒が分かる生徒に教えてもらいながら折る様子や、1時間でどれだけ折れるか競う様子など、生徒が主体的に取り組む様子が見られた。欠席がちな生徒が教室に来たときには、学級の輪の中に入れるような声掛けを周りの生徒が自然としていた。



【取組 3】(B 中学校)

国語の授業では、生徒が好きなものや紹介したいものを決めてスピーチに取り組む学習活動を実施しており、そのための準備を行った。スピーチを二人一組で練習する活動では、教員が疑問に挙がりそうなことや注意点を端的に確認してから活動を開始したため、対話的な学習活動の時間に教員が過度に助言することなく、生徒が自らすすんで取り組むことができていた。

【取組 4】(C 中学校)

研修スライドと生徒意識調査のデータを用意し、20分の研修を実施した。研修の前半は東京都から共有された研修キットを基に、4人程度のグループで「居場所づくり」の取組のアイデアを共有した。後半は生徒意識調査のデータを提示し、協議した。

「居場所づくり」の取組案を書いたワークシートを回収し、後日、各巡回担当校で出た案を1枚にまとめてフィードバックを行った。

多様な学びの場を確保する取組

〔「早期支援」及び「長期化への対応」の取組〕の推進

支援会議（D中学校）

隔週で特別支援教育委員会と不登校支援委員会を行っている。どちらの会議でも、学年ごとに会議で支援策を考えたい生徒を選定し、状況の把握や支援の方向性を共有している。SCや特別支援教室の専門員も会議に参加することで、多角的なアセスメントを行えるようになっていく。

アウトリーチによる支援（E中学校）

不登校対応コーディネーターの教員が中心となって、保護者もしくは当該生徒と面会できる時間を設けた。家庭訪問では、当該生徒の考えや、家での過ごし方を確認し、学校ができる支援を提案した。こうした提案を継続したことで、当該生徒が校内別室に登校できるようになった。

校内別室における支援（C中学校）

1 部屋を個別ブースと集団ブースに分けて運用している。生徒は校内別室に直接登校し、ホワイトボードに登校時間と給食の有無を記入している。その後、記録帳に1日の過ごし方を記入し、計画的に過ごしている。

学年教員が来室することも多く、給食の喫食有無の確認なども併せて行っている。記録帳は校内別室指導支援員と担任で確認しており、個別連絡は直接やり取りをしている。



デジタル機器を活用した支援（E中学校）

学習支援ツールを活用し、オンライン授業を受けられるようになっている。また、校内別室生徒用に学習支援ツール上にフォルダを作り、必要な情報を保存している。



関係機関との連携（B中学校）

不登校が長期化している3年生の生徒に、ケース会議で得たSSWからの情報を基に、学習プリントを週に1度、届けている。また、担任と連携し、進路に関する資料も届けている。一度だけ本人とインターホン越しに会話することができ、プリントの感想や進路について意向を確認することができた。

成 果

各巡回校での支援体制を把握し、好事例の共有を図ることで、担任とつながりがもてた生徒や週に数回登校できるようになった生徒など、状況が好転した不登校の生徒がいた。

課 題

不登校対応巡回教員の役割がまだ十分に理解されていないため、教職員、生徒・保護者への理解啓発が課題である。